



第15回大磯ロングビーチ・ファミリートライアスロン大会 with コロナ国内初のトライアスロン大会

審判長 墨さち枝

2020年という年は、おそらく「コロナ前」「コロナ後」と後々 節目として語り継がれる歴史に残る年になるだろう。1年を通してありとあらゆる年間行事やお祭り、コンサート、スポーツイベントが開催中止となり、まさかの東京オリンピック・パラリンピックまで開催延期。当然ながらトライアスロン大会も春先から軒並み中止になっていた。

春の緊急事態宣言も明け 第1波が下火になった6月、大磯大会を今年も9月に開催しよう、との話がもち上がり「本当にやれるのか？」と半信半疑で会場下見やプランを進める。県や自治体、会場となる大磯ロングビーチからいつ中止判断が下るか分からない、開催することでコロナ感染者を関係者から出す訳にはいかない、連日報道されるコロナ感染の拡大にただでさえ世界も国内も翻弄される中、夏場に募集が始まった。

応募者の多さから、大会開催を楽しみに待っているお子様連れのご家族が多くいる事が分

かった。この大磯大会は、大会名の通りファミリー向けのトライアスロン大会で、乳児からちびっ子、小学生低学年・高学年、中学生、高校生、と初めてトライアスロンにチャレンジする児童・学童が多く集う、夏の家族の思い出となるイベント。子供たちも年初は学校も休校で、旅行どころか外出もままならない家で宿題せめの生活を送り、エネルギーを持て余していたのだろう。このコロナ禍、そんな家族がエントリーして下さったと思うと、何とかして安全を守り、夏の良い思い出になる大会にしたい・・・そんな一心だった。

準備は、コロナ対策を中心に従来のやり方をことごとく変えた。前例に無いなど言われていられないし、この大会運営の成否で後続の大会開催の可否も影響してくると分かっていた。まず選手説明会を事前のオンライン視聴に変えた。ナンバリング(腕にゼッケン番号を書く)も止めキャップに番号を書く工夫をした。検温は、動線は、応援は、表彰式は、スタートは、、、模索しながら1つの形になった。

大会当日は晴天に恵まれ、転倒事故や大きな怪我もなく、また実施2週間後のコロナ感染報告もなく無事に終了した。何より印象的だったのは、小さな子供たちがひたむきに前を見てチャレンジし、元気一杯にフィニッシュし、ご家族や友達同士で和気あいあいと記念撮影をしていた姿。レースと言えば、通常なら着順やタイム、お友達やライバルとの勝敗に意識がいくものだが、2020年の大磯大会はお互いが再会を喜び、一緒に大会に出られる事を楽しむ平和で笑顔に溢れる大会となった。

大会開催を決定した各関係者の意気込みと、開催を楽しみにしてくれていた選手やご家族の想いが結集した。振り返った時に今回が良い思い出として残り、また来年も再来年もこの大会に来て楽しんで頂ければ、審判員冥利に尽きる。

